

### 経営者への活きた言葉

#### 経営者は必ず成功させなければならない 古森 重隆(富士フィルムホールディングス会長・CEO)

1. リーダーシップの本質は、「最も優れた人間が最も優れた決定をする」ということだ。会社に当てはめれば、「優れた独裁者が率いる組織が最良の組織」になる。もちろん、民主主義や多数決による意思決定を否定するつもりはないが、これは平時においてだ。危機下では、周囲に意見は求めるが、リーダーが己の責任で決断し、組織を導く。どこの世界に、兵隊一人ひとりの意見を慮って作戦を遂行する指揮官がいるというのか。
2. 現実社会は多数決の民主主義で回っている。だが、企業が民主主義である必要はない。民主主義的に決めることで各方面への目配りは行き届くが、結果として平凡な経営になる。誤解を招く表現なのは承知のうえであえて言おう。経営者は優れた独裁者であるべきだ。その代わりに、リーダーは自身の決断に責任を持たなければならない。リーダーの失敗で組織が破滅する以上、「間違えました」では済まない。侍は失敗すれば腹を切った。どんな決断であれ、リーダーは必ず成功させる必要がある。これは極めて厳しい道だ。
3. 経営者は学者や評論家ではない。実行したうえで必ず成功させなければならない。そのためには、己の人間力を磨く以外にない。

(参考:「日経ビジネス」2014年2月3日号)

### 経営者のための理念・哲学

#### 創造力と分別力 江崎 玲於奈(物理学者・元筑波大学学長)

1. 人間の知的能力には新しいアイデアを生み出す創造力と、物事を理解して判断する分別力があります。20歳から70歳までを考えると、分別力は20歳でゼロですが、70歳で百になります。創造力は20歳をピークとして段々衰えてきます。この分別力と創造力が拮抗きっこうするのが45歳くらいです。
2. 世界のノーベル賞の対象になった業績を見ると、その多くは受賞者が45歳より若い時の仕事であることは確かです。それに45歳というのは人間にとって活動の一つの頂点であると同時に人生のクライシスでもあります。三島由紀夫が自殺したのも45歳でした。こういう危機状態に陥りやすい年齢なのではないかと思ったりもします。私が筑波大学学長選に出馬したのも70歳近く(67歳のとき)になって、少しは分別力が付くようになったかなと考えたことが大きかったです。

(参考:「致知」:2014年4月号)